

2022年5月1日「良い羊飼いキリスト」

エゼキエル書 34 章 11～16 節
ヨハネによる福音書 10 章 7～18 節

良い羊飼いの日曜日

今朝、与えられましたヨハネによる福音書の個所は主の復活のお祝いをした後の主日の礼拝で読まれる伝統がありまして、私たちも今日それを耳にしました。この日は「良い羊飼いの日曜日」と呼ばれます。

イエス様がよみがえらなかったならば、とパウロは語ります。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」(I コリ 15:14)。この言葉は背理法で語られています。つまり事実ではないことを述べ、そうであったならばこのようになるという論法を使ってイエス様の復活を証ししています。この言葉を通常の文にすると「キリストは復活したのだから、私たちの宣教は意味があり、あなたがたの信仰も意味がある。」となります。パウロは背理法によってキリストの復活を強調しました。

私たちも本日与えられた御言葉を通してイエス様の復活を信じる者へと導かれたいと思います。イエス様はご自分が何者なのかを明かされています。それは旧約聖書のエゼキエル書によっても預言されていました。

イエス様が私たちの羊飼い

先ほど、私たちがヨハネによる福音書の朗読の中で聞いた「私は良い羊飼いである」という言葉は聞き逃すことができない言葉です。この言葉の翻訳についてプロテスタント教会に多大な貢献をしている加藤常昭牧師は気がかりを感じていると語っています。加藤牧師は、「私<が>良い羊飼いである」と訳すことで、イエス様がおっしゃった意味がよくわかるということです。「私は」というのと「私が」というのでは意味が違います。原典では「は」と「が」の違いはありませんが日本語では違いがあります。たとえば、私は父である、というのと、私が父である、というのでは意味が違います。ある子どもが一人でいたとして、その子の父親を捜している時に、その子の父は「私が父です」と名乗り出ででしょう。イエス様は、ここで、「私が良い羊飼いである」と名乗り出ておられます。「わたしこそが」と言われているのです。

他にはいない。「羊、すなわち私たちを養う良い羊飼いは私の他にはいない」、とイエス様は言われます。キリスト教を騙(かた)るいくつかの宗教があります。聖書の言葉が使われているのですが、イエス様以外の人を救い主と教えています。それをキリスト教と混同してはいけません。教えが似ていても、イエス様の権威以外に私たちが欲望や誘惑から解放される道はありません。

良い羊飼いの良いとは何か

イエス様が言われる「良い羊飼い」の「良い」とはどのようなことを意味しているのでしょうか。たとえばですが、コンシェルジュという職業があります。ホテルで観光スポットの案内やチケットの準備、旅行のプランニングといったお客さまの多くのリクエストに応え

るプロのスタッフのことで、最近ではホテル以外にも、病院、駅、レストラン、百貨店、高級マンションなどに活躍の場を広げています。この人たちはお客様の潜在的なニーズを引き出してその施設で楽しいひと時を過ごすことができるようにしてくれます。この人たちは私がしたいと思っていることを実現させてくれる人という意味で「良い」と言えます。

しかし、イエス様が言われる「良い羊飼い」の「良い」はそれとは意味が異なります。どのように違うかと言いますと、イエス様は羊のために命を捨てるのです。羊は危険を察知する能力に乏しく、襲われても逃げることができない、つまり自分で身を守ることができない動物だそうです。穴に落ちると自分で這い上がることはできません。一方で羊は人間にとって有用な財産でした。盗人や強盗が狙うのには格好の対象です。その羊を守るために命を懸ける、そのことが「良い」ということなのです。

私たちのしたいことを何でも叶えてくれる人と、私たちを命懸けで守ってくれる人どちらについていきたいと思いませんか。このような質問をする必要もないくらいですが、私たちを命懸けで守ってくれる人であります。このようなお方がイエス様です。

さて「私が良い羊飼いである」という言葉を、ある神学者は「私がまことの羊飼いである」と訳しました。この世界には偽物が多いから、まことの、本物の羊飼いがイエス様だということを私たちは知らなければなりません。

イエス様はご自分を他の言葉でも明らかにしています。ヨハネによる福音書にある言葉を「私が」として引用しますと、「私が命のパンである」(ヨハ 6:48)、「わたしが世の光である」(ヨハ 8:12)、「わたしが復活であり、命である」(ヨハ 11:25)、「わたしが道であり、真理であり、命である」(ヨハ 14:6)、「わたしがぶどうの木である」(ヨハ 15:5) となります。このように聞くことによって、私たちには、まことの羊飼いが与えられていることを知ることができます。9節で「私が門である」と言われたのも、他の門を通して迷い苦しむことにならないように、この門をくぐりなさいと招いているのであります。イエス様はご自分を明らかにする言葉を語るだけでなく、私たちに教え、そして実践なさいました。命を懸けるということすら言葉だけでなく、私たちを悔い改めへと導くために本当に死なれたのであります。ここで大切なのはイエス様の権威です。イエス様が「私たちの主」としてこのことを告げておられることを、私たちは聞き、信じることを、このことが大切です、

7節から18節の中に、新共同訳では確認が難しいのですが、「権威」という言葉が隠れています。18節をご覧ください。「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」というイエス様の言葉が記録されています。これを原典の言葉通りに訳すと「誰も私から命を取らない。そうではなく、私は自分自身で(命を)捨てる。私は命を捨てる権威を持っている。そして再び命を受ける権威を持っている。私は私の父からこの命令を受けた。」となります。日本語としては少したどたどしい文章ですが、注意していただきたいのは、「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。」というの「イエス様がその権威を持っている」ということです。英語の訳では権威以外に、力とか自由と訳しているものもあります。これも良い訳だと思えます。つまり単なる能力を語っているのではないのです。

尊厳が踏みにじられた人々への約束の言葉

エゼキエル書34章には主なる神が、「羊飼い、牧者として自分の群れを探し出し、彼らの世話をすると、預言者エゼキエルの口を通して言われたことが記録されています。主はご自分の群れを養い、憩わせてくださいます。当時のバビロン捕囚の人々はエゼキエルの預言を聞いて非常に慰められました。彼らは国を滅ぼされ、遠いバビロニアの地で働かされていました。民族の尊厳が踏みにじられ、捕囚という立場で故郷のエルサレムを懐かしんでいました。

イエス様は十字架の上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれましたが、捕囚の民はその叫びと同じ叫びを叫んでいたことでしょう。しかし、それで終わりにはなりません。捕囚の民は時が満ちて解放され、エルサレムに戻ることができたのです。それは民族が復活した出来事と言っても良い出来事でした。

イエス様の権威はどのような力にも妨げられることはありません。ご自分で私たちのために、私たちに代わって死ぬことを選び取られ、再びよみがえられることを選び取られたのです。その権威が私たちを守ります。

我がまますを許すお方としてではなく、私たちに傲慢や誘惑から守ってくださる良い羊飼いとして、まことの羊飼いとして私たちに養ってください。

私たちは食べ物があるだけでは生きていくことはできません。私たちが主のものであり、主に働きを与えられて、守っていただいているものであることを知って、初めて生きていることに喜びを覚え、食事を美味しくいただくことができるのです。

生きる理由が見つからない人にとってはどんなに豪華な料理も喜びとはなりません。どんなに豪華な宮殿に住み、多くの従者を従わせていても、満ち足りることはありません。満足を求めて刹那的な快樂に身を委ねることになりかねません。なぜなら生きる意味を知らないから、守られていることを知らないからです。

イエス様に出会いよみがえった人のこと

水野源三さんは9歳で重い病気になり、目と耳の機能以外のすべてを失いましたが、宮尾牧師との出会いを通してイエス様の愛を知りました。水野さんは神さまを讃える多くの詩を創作し、キリスト者だけでなく多くの人に慰めを与えました。彼にできたのはまばたきをすることだけでしたが、それによって紡ぎ出された彼の詩には神さまに生かされている喜びがあふれています。彼はイエス様と出会ってよみがえった人だと言っていると思います。その人の詩が健常者を励まし続けています。イエス様の復活は私たちの人生に意味と憩いをもたらすのです。

み言葉の宣言

この世界に「良い羊飼い」はイエス様以外にはおられません。イエス様は私たちの救い主です。私たちはイエス様のみですべてのことを委ねて、イエス様の囲いのうちにいて平安を得たいと願います。

アーメン